



2009年3月

図書館 まなびトーク

学人ニュース

図書館を利用して行った生涯学習の発表会

「知ること」のよろこび

図書館 まなびトーク

平成21年3月18日(水)午後2時から当館研修室において、松戸市の湯沢幾男さんが「日本の「風土」を考える～二つの「風土論」から学んだこと～」、柏市の阿部幸次さんが「樺太アイヌの歴史と山辺安之助の『あいぬ物語』」について発表してくださいました。(要旨は次ページ以降)

当館は、開館以来地域に根ざした活動を展開してきましたが、昨年度に20周年を迎えたのを機に、県民にもっと図書館活動の意義を広く知ってもらい、利用者と図書館のコミュニケーションの拡大を図る方策を模索してきました。

また、団塊の世代や既にリタイヤされた方の退職後の生き方や「生きがい」が新聞や雑誌等で話題になっておりますが、図書館としても何かお手伝いすることができるのではないかと考えてきました。

そこで、日頃図書館を利用して生涯学習を行っている個人やグループの方に、学習成果について発表していただく機会を提供しようと、去る2月14日(土)締切で発表者を募集していたところ、好意的な反響が多数寄せられ、最終的には湯沢さんと阿部さんのお二人が応募してくださいました。

当日は晴天に恵まれ、約50名の方が参加され、それぞれ約1時間にわたるお二人の発表に熱心に耳を傾けておられました。

コアラテレビで放映されました

「図書館 まなびトーク」の様子は、地元ケーブルテレビの「コアラテレビ」で、3月19日(土)夕方のデイリー・ニュースで放映されました。

産経新聞でも紹介されました

3月19日付けの「産経新聞 千葉版」に掲載されました。



参加者の声

日頃の研鑽の成果を発表されており、楽しく聴講させていただきました。古代から現代に至る人や言語の移動・発達史に興味があり、将来は発表できるようにしたいと思います。(野田市 66歳)

とても楽しい企画でした。図書館で調べても発表の場がないなど、成果が見えてこないということもありましたが、はげみになると思います。研究発表・成果だけではなく、調べる過程の発表もあってよいのかなと思いました。(船橋市 61歳)

発表を聞いて興味がわいてきました。各々のテーマについて図書館の本を探してみたいと思いました。(松戸市 50代)

各人が自分に興味のある題目で調べて感じたことを発表することは、発表者にとっても非常に充実した行為であろうと信じる。是非継続してほしい。(松戸市 65歳)

日本の「風土」を考える ～二つの「風土論」から学んだこと～

湯沢幾男



はじめに

- * 100回を迎える「読書交遊会」のこと
- * 松戸暮らしと「地域」
- * 信州田舎暮らしと「集落」
- * 「風土」とのかかわり

昭和初期と二つの風土論

<三澤風土論> 1929年 昭和4年10月24日木曜日。世界の株式市場を取り仕切るアメリカウォール街の株価が大暴落。世界経済は恐慌に陥り、輸出の大部分を担う日本の生糸相場を底無しに直撃。地方銀行の倒産が続出するなど不況は全産業におよび、失業者が巷にあふれた。不況の波は農村を襲い、加えて昭和6年の東北・北海道の米の大凶作により農村の疲弊は深刻な様相を呈す。農家の負債は、農業総生産の2倍に当たる総額46億円にもなった。

三澤勝衛（1885～1937）は農家の長男として長野県更級郡更府村（現長野市更信町）に生まれる。尋常小学校卒で農業を継ぎ勉学に励む。農業と教員の両立を条件に父親を説得し、更府村の代用教員になる。1915（大正4）年検定試験に合格。師範学校・中学校・高等女学校地理科の免許取得。1920（大正9）年諏訪中学（現諏訪清陵高校）教諭になり、1937（昭和12）年52歳で病没するまで17年間地理を教える。生徒に「自力」を見つけ出させる教育で門下生から数多くの科学者を輩出した。三澤は、昭和初期の農村恐慌下で、地べたを這うがごとき「野外凝視」により独自の風土論を確立。その成果を諏訪中学の地理教育にとどめず、各地の農村青年講習会で自然力による更生を説いてまわった。その内容が本書『風土産業』である。

<和辻風土論> 1928年 昭和3年8月。西田幾多郎が京都帝大を定年退職する。京都学派の哲学形成は、1910（明治43）年8月に西田の京都帝大助教授就任からはじまる。西田の招きにより、田辺元（1885～1962）、和辻哲郎（1889～1960）、九鬼周造（1888～1941）が京都帝大哲学科に赴く。西田を慕って京都帝大哲学科に入学した門下生からも天野貞祐、務台理作、三木清、高坂正顕、西谷啓治、戸坂潤、唐木順三など多数の著名哲学者を送り出す。西田を頂点に京都学派と呼ばれる日本の哲学の大山脈を形成する。和辻哲郎は1927（昭和2）年2月に文部省在外研究員としてヨーロッパに出発。船の中で京

都帝大農学部の大槻正男教授から「ヨーロッパには雑草がない」という驚くべき事実を教えられる。これは啓示に近いものだったと、和辻は書いている（本書は昭和3年9月から4年2月に至る京都帝大での倫理学講義の草案を基礎にして書かれた）。*さて、われら昭和ヒトケタ世代の役割は？

三澤勝衛の風土論

1 風土とは何か 「風土 大自然である。/大地の表面と大気と底面との接触からなる一大合体である。/この風土に正しく生きることによってのみ、初めて真にその風土が活かし得るのである。」「大気と大地がふれあっているところになりたつ「もはや大気でも大地でもない、気候でも土質でもない独立した接触面」が風土。この接触面 風土の特徴が「地域の個性」「地域力」の源泉。

2 野外の凝視 「草も語る、木もかたる、/いな草木鳥獣みな語る、/大自然の持つその真相を。/しかしわれらは淋しい、/その言葉のどれだけが、/今のわれらに分かっているか。/自然への愛着と、親しみ/これこそ真の唯一の鍵だ。/われらは聴こう、野に立って、/その自然が物語るを。」「教育は教えるものではなく学ばせるのだ。何をおいても、まず野外に立ち、その野外を凝視することがもっとも大事な作業である、と。

3 風土産業 風土はそれぞれの土地に固有のものであり、また畑、屋敷、集落というように複層的に存在する。気温、雨、通風など風土は無価格ながら偉大な価値をもっており、それを発見し、活かすことで地域にねざした自然エネルギーを取りこんだ循環型の産業をつくることのできる。これは、地域の暮らしや景観、地域への共感、愛着などの生活全般につながる「風土生活」論でもある。

和辻哲郎の風土論 三つの類型

日本から出発して太陽と同じに東から西へ地球を回っていくと、初めにモンスーン地域の烈しい「湿潤」を体験する。この湿潤は、「モンスーン型」の文化類型を己に形成する。沙漠地域では、徹底的な湿潤の否定「乾燥」を体験する。この乾燥も沙漠地域の人間の体験であり、「沙漠型」文化類型となつてあらわれる。ヨーロッパに至ればもはや湿潤でも乾燥でもなく、湿潤であるとともに乾燥なのだ。夏が乾燥期だから、牧草のような柔らかい冬草を駆逐する雑草がはびこらない。人力を加えなくても一年中牧場として役立つ。「牧場型」文化類型。

1 **モンスーン型 日本の例** モンスーンは季節風。夏は熱帯の大洋から陸に吹く風。モンスーン地域の風土は暑熱と湿気との結合を特性とする。その水は「台風」という突発的な猛烈さにおいて世界に比類なきかたちをとる。冬の積雪量においても世界にまれな大雪になる。大雨と大雪、それは熱帯的、寒帯的の二重性格になる。植物には、夏の熱帯的の稲と夏草、冬は麦と冬草。豊富な湿気が人間に食物を恵むとともに暴風や洪水として人間をおびやかす。人間に受容的、忍従的な二重性格をもたらす。

2 **沙漠型 アラビアの例** 強い日照にもかかわらず雨は年に4~5回。乾燥の生活は「渴き」である。外なる自然は死の脅威をもって人に迫るのみ。自然の脅威と戦いつつ、沙漠の宝玉なる草地や泉を求めて歩く。これらは、人間の団体の争いの種ともなる。自然に対して人間の団体に対して、二重の意味で、対抗的・戦闘的である。

3 **牧場型 ギリシアの例** 地中海は乾いた海。この海の蒸発では夏の空気を潤すことはできない。だが、ギリシアの気候に四季はある。3月に春がはじまり6月までつづく。6月半ばから9月半ばまで雨が降らず暑い夏になる。9月にさわやかな雨がきて

草が緑になる。11月から3月までは雨期で牧草や麦が青々と育つ。自然に忍従して恵みを待つ必要はない。自然に対抗して戦闘的態度を取らなければならないほど人を脅かしもしない。自然はひとたび人力の支配のもとにおけば、適度の看護によって、いつまでも従順に人間に服従している。この自然の従順が生産を牧場的にする。人間が従順な自然への支配を自覚し自然の支配者として己れの生活を形成した。ギリシアの自然との調和は、自然の人間化、人間中心の立場の創設であった。

おわりに 暮らしやすい地域の形成をめざして
地域の生活価値+環境価値+文化価値

参考文献

『風土産業』三澤勝衛著 古今書院 1952年11月初版 県中央図

(三澤勝衛著作集3『風土論』みすず書房 1979年6月初版 県中央図)

『風土 人間学的考察』和辻哲郎著 岩波書店 1935年9月初版 県西部図

樺太アイヌの歴史と山辺安之助の『あいぬ物語』

阿部幸次



はじめに

私はスペイン・ポルトガル・ブラジル文学の翻訳家で、これまでペレス・ガルドス『マリアネラ』、ジョルジェ・アマード『砂の戦士たち』、フェレイラ・デ・カストロ『大密林』(いずれも彩流社刊)などの文学作品を翻訳

しました。一方、北海道に1984年から3回通算10年の居住経験があり、89年にサハリンに旅行し、その見聞を『北海道・サハリンの旅』として自費出版しました。また、3年前からアイヌ語を学んでいます。そんなことから、樺太アイヌの歴史について興味を持ち、図書館の資料を使って調べました。今回は、樺太千島交換条約に伴う北海道移住から、日露戦争後の帰還までの樺太アイヌの歴史を概観し、併せて樺太アイヌである山辺安之助が自らの移住体験をアイヌ語でつづった『あいぬ物語』を紹介したいと思います。

移住前の樺太アイヌをめぐる状況

樺太アイヌは主に北緯50度線以南の南樺太に住し、漁労・採集を生業としていましたが、19世

紀初頭からの日本の漁業家の進出に伴い、その多くは漁場に雇われ、食料など生活物資を漁業家に依存する生活を送っていました。伊達・栖原の両家が経営する漁場の数は明治初年に57か所、建物は352棟を数え、労働者の大半は樺太アイヌだったようです。なお、樺太アイヌの北側には、ウイльта、ニブフの北方民族がおり、ウイльтаはトナカイ飼育、ニブフはアザラシ猟とさけ・ます漁を主な生業としています。

1873年当時の人口調査があり、当時の南樺太に住んでいたのは、和人が出稼ぎも含め557人、アイヌなど先住民族が2372人、ロシア人が士官兵卒を中心に農民、流刑者ら1110人です。

樺太千島交換条約と樺太アイヌの北海道移住

樺太千島交換条約は1875年(明治8年)5月7日にペテルブルグで調印されましたが、当初は国民に知らされず、国内の報道が許されたのは10月15日でした。条約では、住民の残留と移住の自由が認められていました。ただし、日本人が残留を望む場合は日本国籍のまま残留できるが、先住民で日本国籍を望む者は移住し、残留する者はロシア国籍になると決められていました。

樺太アイヌの北海道移住について、強制移住という言い方がされていますが、選択の自由はありました。また、開拓使も積極的に移住を奨励したわけではなかったようです。実際に移住に応じたのは、約2400人のうち、841人で大半がアニワ湾沿岸の住民でした。一方、西海岸の住民で移住に応じた者は少なかったようです。住民が移住を選んだ理由としては、まず日本人漁業者との結びつきがあげられます。漁場がなくなれば、生活基盤がなくなります。また、漁業者が供給していた米食への魅力もあったようです。

移住は9月9日から10月1日にかけて行われ、住民はまず宗谷地方の12か所に移住しました。ちなみに当時宗谷地区にいたアイヌは256人で、樺太アイヌの移住に危機感を持ち、石狩移住を開拓使に働きかけたようです。開拓使はもともと彼らを石狩に移住させるつもりで、土地を用意していました。そうして翌年7月、宗谷にいた樺太アイヌ全員を、小樽を経由して、石狩川に面した江別市近郊の対雁に移しました。

開拓使は彼らを農業に従事させる意向でしたが、もともと漁労が生業のため、反対が強く、石狩、厚田の7か所に鮭と鱈の漁場を用意しました。一方で、一戸当たり500坪から1000坪の土地を与えて耕作させましたが、不慣れなため、成果は上がりませんでした。それで男たちはもっぱら漁場に出稼ぎしました。女たちは製網と養蚕、製糸を学びました。子供たちには教育所が設けられました。1882年(明治15年)に開拓使が廃止されると、共救組合を結成し、自ら漁場の運営や学校の維持、民生に当たりました。

そうしたとき、流行したのがコレラと天然痘で、1886年(明治19年)夏から翌年春にかけて大流行し、2年間で358人が亡くなりました。この2年間では、北海道全体でも4400人余りが亡くなっていますが、対雁で住民の半数近くが亡くなったのは、密集して住んでいたのが原因の一つのようです。

このあと、対雁の住民の大半は漁場のある石狩の来札に移り、対雁は廃村のようになりました。また、一部の住民は墓参目的や再開された漁場で働くため樺太に帰還し、1905年(明治38年)日露戦争が終わった時には、樺太アイヌは北海道に217人しか残っていなかったといえます。その彼らも大半は翌年秋までに樺太に帰還しましたが、樺太帰還後の生活は、指定集落と呼ばれる一定区域に居住させられ、兵役、納税の義務も課されて生活は窮屈だったようです。1908年(明治41年)の人口調査では樺太アイヌの人口は1597人。帰還者のため、

1904年のロシア領当時の調査より200人余り増えていますが、その後昭和16年には1272人まで減少しました。

山辺安之助と『あいぬ物語』

樺太アイヌの山辺安之助(1867-1923)はアニワ湾に面した野満別の村に生まれ、9歳の時、対雁に移住、教育を受け、漁場で働いていたが、明治26年、墓参名目で、妻子、知人ら12人とともにロシア領だった樺太に帰還、そのまま定住し、漁業に従事した。日露戦争が起きると、日本軍の案内役を務め、樺太での戦闘の勝利に貢献した。南樺太が日本領となつてからは、アイヌのために学校の設立や漁場の確保に奔走した。さらに、明治43年に南極探検が計画されると、樺太犬を率いて自ら参加した。

『あいぬ物語』は、南極探検を終えた1912年(大正元年)その波乱に富んだ半生を樺太アイヌ語で語り、金田一京助が筆録、翻訳したもので、アイヌ語として初の散文作品であるばかりでなく、樺太アイヌの歴史を語る第一級の史料となっている。

参考文献

『対雁の碑』樺太アイヌ研究会編 北海道出版企画センター 1992年 県中央図

『あいぬ物語』山辺安之助著(『アイヌ史資料集』第6巻所収 北海道出版企画センター 1980年) 県中央図

『樺太アイヌ叢書』千徳太郎治著(『アイヌ史資料集』第6巻所収 北海道出版企画センター 1980年) 県中央図

図書館から お礼

「図書館 まなびトーク」には、普段西部図書館を利用されている大勢の方においでいただき、誠にありがとうございました。今回の成果を踏まえて、より一層、皆さんの役に立つ図書館サービスに努めてまいりたいと思います。また、慶應義塾大学文学部の糸賀先生始め、奈良県立図書情報館様など、県内外の図書館関係者の方にも見ていただきました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

図書館 まなびトーク 学人(まなびと) ニュース

発行日：平成21年3月27日

編集：千葉県立西部図書館

〒270-2252

千葉県松戸市千駄堀 657-7

TEL 047-385-4133

<http://www.library.pref.chiba.lg.jp/>